Title	ダグラス・ケルナー著 『ヘルベルト・マルクーゼとマルクス主義の危機』
Sub Title	Douglas Kellner, "Herbert Marcuse and the crisis of Marxism"
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1987
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.60, No.6 (1987. 6) ,p.130- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19870628-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Douglas Kellner,

*Herbert Marcuse and the Crisis of
Marxism*

London, Macmillan, 1984, X+505pp.

ダグラス・ケルナー 著

『ヘルベルト・マルクーゼと

マルクス主義の危機』

一九六〇年代にはあたかも一世を風靡したかのようなヘルベルト・マルクーゼの名は、七〇年代には薄らぎ、七九年彼の死とともに今日では、作品としてのごされた遺産のほかには、殆んど忘れ去られたかのように思われる。だが、思想の本源的な力は、何のいわれもなく、偶有的な存在であったかの如く、消滅してしまふものであろうか。Why Marcuse? というケルナーの問いには、彼みずから恐らく目撃者であった過去に向か

つてと同時に、未来への問いかけが含まれていよう。「比較的無名のドイツ系アメリカ人の哲学者がマス・メディアで名声を博し、反抗する若者の国際的な英雄となる。どうしてこのようなことが起ったのか。なぜ、マルクーゼは当時最も話題にされ、論争的であった知識人となったのであろうか。顧みれば、マルクーゼの思想は、一九六〇年代の文化的・政治的環境にとつてまことに打ってつけであった。高度産業社会に対する彼の非妥協的な批判は、ヴェトナム戦争に踏みこじられた若い人びとの世代によって感じられた憤怒と嫌悪、黒人その他の少数者の圧迫、消費社会の富のかたわらに存続する貧困を明確に表現していた。……マルクーゼの現代社会批判は、生産、消費、社会統制の現存体制のなかに行き渡っている疎外と反抗との根底にまで浸透したという意味において、ラディカルであった。圧迫の主要な根源は高度産業社会であるのか、その《技術合理性》であるのか、それとも資本主義的生産様式であるのかについて、彼自身の理論のうちにある曖昧性が、〈機構〉に対する対抗文化の敵たちと資本主義に対する急進的な敵対者たちをして、ともにマルクーゼを彼らの代弁者であり盟主であると見なすに至らしめた。最も主要なことは、マルクーゼが現代社会に代る選択肢を提供したことである」。

ケルナーはさらに続けて、「マルクーゼは、多数の著作、講義、会議、西欧世界じゅうをめぐる講演旅行を通じて、現代社会への批判および社会変革への要求をたゆまず宣伝した。一九

六〇年代はついに、数十年にわたる政治的孤立の後に、マルク
ーゼがみずから同一化しえた運動を提供したのである。多様な
新左翼や第三世界の政治運動に対する彼の熱狂が、彼を賛美す
る若者たちに愛された。彼は……人間的な魅力とカリスマを生
みだすことができた。……彼の理念と政治とに反応した多くの
人びとが実際に彼の著述を真面目に研究したとは思われないけ
れども、彼の思想が一九六〇年代の政治文化に吸収され、世界
的規模のインパクトを与えたことは疑い無い。確かに、彼の作
品が時代の流行ではもはやなくなったとき、彼はメディアから
の名声を失わざるを得ない破目となった。そのうえに、新左翼
のせめぎあひ党派——彼らの多くは明らかにマルクーゼの政治
を清算して旧左翼の分派、もしくはテロリスト幹部に身を投じ
た——が分裂するとともに、また六〇年代の対抗文化が七〇年
代にさまざまな一時的流行へと分裂するとともに、彼はみずか
らの理論にとつての社会的基盤を失うことになる」と。

このような眩いばかりの幻惑——メディアによる《マルク
ーゼ》現象ともいふべきもの——が理論家としてのマルクーゼに
対する幾多の誤解を生み、彼の現代思想への貢献を評価する障
害となってきたことは否めない。ケルナーによれば、彼の思想
の営為は「今世紀の最も意義深い歴史的・思想的出来事」であ
って、「マルクーゼは、哲学と政治の融合を試みようとする数
少ない現代思想家のひとりであって、哲学と社会理論における
彼の著作ならびにラディカルな政治への関心によって、彼は現

代史において主要人物となった。彼が最初に出版した論文以来、
マルクーゼは、真正なマルクス主義の標徴と彼が信じた理論と
実践の統一を求めて、不毛な正統性へとマルクス主義が頹落し
つつあった時代のさなかに、マルクス主義の理論をふたたび活性化
し、再構築しようと求めたのである」。ケルナーは、本書の標
題が示すように、《マルクス主義の危機》——それは、資本主義
の《危機》と同じように、マルクス主義に周期的に訪れるもの
であって、ケルナーの見解によれば、マルクス主義の挫折では
なく、むしろその理論的な発展と修正とをうながすという——
に対応して、マルクーゼが遂行した「英雄的な、時として絶望
的な試み」を冷静に評価しようとする。

従来のマルクーゼの読み方は、彼の思想を変化する歴史状況
のコンテクストにおいて、マルクス主義をいかに批判的に発展
させたか、という側面を見逃している。また、彼に対する批判
者たちは、マルクーゼの思想の《根源》と《生成》とを探究す
ることなく、マルクス主義と批判理論との関連において彼の理
論的作業を適切に解釈することも充分になしていない。これま
での「一面的な、歪められた解釈」に対抗して、彼の思想の
「複合的な総合、曖昧性、緊張、修正を詳細に分析する」ため
に、ケルナーは、伝記的・知的な形成過程をも含めて「歴史的
II 生成的アプローチ」を採用する。そして、マルクーゼの思考
とその理論的パースペクティヴの中心には、つねに歴史のカテ
ゴリーとしての「解放と革命」への問題関心があり、それらが

社会的・歴史的状況のなかで異なった形式と内容を取りながら、彼の思想発展の継起的段階にいかんにかあらわれているかを読み取ることがその課題とされる。マルクラーゼの *life-work* を九章に分けて、ケルナーはそれを年代順に記述してゆく。

「若きマルクラーゼ」は、第一次大戦中はベルリンに滞在し、労働者の政治運動に加わり、SPDに入党している。一九一八年のドイツ革命のときには、みづから兵士評議会の一員として闘争に直接参加した。彼は、ルカーチやコルシュの世代と同じく、ロシア革命に興奮を覚えたが、KPDに入党した経験は一度もない。政治活動は短期間で終りを告げ、彼は一九一九―二〇年ベルリン大学で学究生活に戻り、四学期をすごした後フライブルグ大学に移る。二二年には博士論文『ドイツの芸術家小説』が受理されるが、これはヘーゲルの美学、ルカーチの『魂の形式』と『小説の理論』の影響のもとに、ドイツ近代文学の歴史的类型化を行ったものである。そこでの主要テーマは、『芸術』と『生』との、『理想』と『現実』との葛藤であり、芸術家の生の形式がブルジョワ社会からの疎外として扱えられている。マルクラーゼは、ロマン派の主観主義的傾向に対しては批判的であるとはいえ、ドイツ観念論とロマン主義の美学には共感を示している。解放された人間実存へのロマン主義的、ユートピア的要求には、後期の著作の全容が、萌芽的な形で認められるであろう。彼は一時ベルリンへ帰るが、再びフライブルグに戻って、一九三二年十二月ドイツを離れるまで、ハイデッガーの

もとで現象学を研究する。このように、マルクラーゼの根源にあるものは、政治(ドイツ革命)と芸術(博士論文)と哲学(ハイデッガー)であり、これらのテーマがやがて一九五〇年代にいたって、ひとつに統合されるわけである。

マルクラーゼの初期の哲学論文(史的唯物論の現象学)「具体的哲学について」は、第二インターにおける修正主義とソヴェトにおける独断論とに対するマルクス主義の哲学的再構築として、きわめて注目し値する。ケルナーによれば、マルクラーゼの現象学的マルクス主義は、たんなる「並置」とか「混乱」であるどころか、ハイデッガーの『存在と時間』に関する「最初の、しかも最善の解釈」である(因みに、ケルナーのロンビア大学に提出した博士論文は *Heidegger's Concept of Authenticity* である)。マルクラーゼにとって、ラディカルな行為としての革命的実践は、歴史における客観的な *Notwendigkeit* ではなく、まさに歴史の具体性に根差す *Notwendig* なものであって、人間の主体的《決断》である。ハイデッガーの《非本来性》と《墮落》という概念は、マルクスの《疎外》と《物象化》に照応するものとされる。しかしながら、現代において《本来性》はいかにして可能であるか。マルクラーゼは、ハイデッガーの存在論的分析によってはその実践的指針を導出することができないことを確認する。彼は、『生活世界』の物質的基礎をマルクスの『経済』と『社会』の弁証法に求め、実存の『歴史性』を把握する方向をめざしてゆく。『経済学・哲学手稿』の研究を契機として、ハイデ

ッガーから離反し、三三年以降彼はフランクフルトの社会研究所のメンバーとなり、ヘーゲル・マルクス主義の立場を明確に決定するに至るのである。

一九三三年ナチスの権力掌握とともに、研究所はパリからロンドン、そしてニューヨークへと移る。マルクーゼも三四年にはアメリカへ渡り、戦時中をおしてほぼ十年間、ワシントンの国務省に勤務する。この間、彼はフランクフルト学派の人びととともに、ファシズム研究に取り組み、資本と主義の危機、ブルジョワ家族、文化とイデオロギーの諸問題を分析し、ホルクハイマーと協力して、批判理論の多元的な展開に寄与する。三〇年代から四〇年代にかけての研究所のネオ・マルクス主義の顕著な特徴は、まさにマルクス主義の危機に際会して、実証主義的、経験主義的研究動向とは対照的に、ヘーゲル・マルクスに依拠する批判理論の方法を適用して、政治、社会、文化のさまざまな問題を分析・批判し、マルクスの理論を創造的に発展させたことである。その主だったテーマ群を列挙すれば、《権威主義的》国家、国家資本主義とともに高度資本主義社会の理論現代社会におけるテクノロジーの問題、行政と社会統制の新しい形態、新しい法人組織と管理形態をとった計画経済、文化産業、労働者の統合化などである。なお、三〇年代のマルクーゼの一連の論文には、ブルジョワ哲学の理性批判、自由と幸福という快樂主義的^{ヘドニスム}マテリアリズム、所与の事実性を否定するユートピア的企投といった理念が色濃く反映されていることを注意

すべきである。彼の批判理論は、『理性と革命』に見事に示され、ヘーゲル、マルクス、社会理論の英語圏への紹介に重大な貢献をなした——ケルナー自身もその恩恵に浴したことを記している。ところで回顧してみると、研究所と協同作業をしていた頃のマルクーゼは、『やや極端なマルクスの正統性』を保持していて、ケルナーによれば、それは「マルクーゼの思想展開のなかでのひとつの断裂のようなもの」をあらわしているかに見える。

第二次大戦後、アドルノ、ホルクハイマー等はドイツに帰国するが、マルクーゼはアメリカにとどまり、研究所との絆が切れると、彼は初期のラディカルな、個人主義的、哲学的な関心に立ち戻る。五〇年代以後のマルクーゼは、冷戦とマッカーシズムに規定されたアメリカ資本主義の相対的安定期にあつて、新たな闘争の時代を迎え、研究所の同僚の誰にもまして、政治的実践の要素を一層徹底化してゆく。『エロスと文明』、『ソヴェト・マルクス主義』、『二次元的人間』はまさにポレミックな作品である。研究所の内部でも、ウィルヘルム・ライヒのファシズムと性的抑圧の問題が討議され、疑問視されていた。だが、マルクーゼはすでに二十年代にフロイトを読んでおり、ジークフリード・ベルンフェルト等のマルクスフロイト論争についても研究していた。そして五〇年代には、シラーの美学、モダニズム芸術の研究を再開し、あわせてフリーリュエやユートピア社会主義を研究しはじめる。したがって、これらのテーマをマル

クスの革命理論のコンテクストにおいて発展させることは、マルクーゼの構想のなかにあったものである。『エロスと文明』の前半は、フロイトの抑圧のプロセスを説明するための心理学的概念を、マルクスの剰余価値と疎外された労働という社会批判的なカテゴリーによって、《過剰抑圧》および《実行原則》というマルクーゼ独自の概念として導入し、フロイトをラディカル化している。その後半において、マルクーゼは、マルクスのプロメテウス象徴を拒否して、解放の原型的イメージとしてのオルフェウスとナルキソスについて語り、抑圧の理性支配に代る感性のリビドーの合理性を強調する。新しい現実原則のもとでは、肉体はもはや労働に縛られることなく、解放されたエロスの非抑圧的昇華がおのずからリビドーの秩序をもたらすであらうという。彼の解放理論においては、エロスは最終的にはタナトスをも馴致するであらう。ケルナーは、こうしたフロイト解釈に関しては、マルクーゼはあまりにもフロイトに無批判的であること——とくにその暗い部分、決定論的、生物学的内容についてそうである——、エロスとタナトスといった神話的概念よりも初期マルクスの人間学的カテゴリーを使用すべきこと、さらに、ハーバーマスやリクールの解釈学、エディプス概念に関する最近のフロイト批判をも含めて再検討すべきことを指摘している。

マルクーゼは、第二次大戦後もひき続き国務省の中欧部門の政治分析主任として、*The Potential of World Communism*

に関する情報文書の作成にもたずさわった。この職を辞して後、コロンビアとハーバードのロシア研究所に所属し、そこで利用しえた多くの資料を基礎として、『ソヴェト・マルクス主義』を執筆した。そうした経緯も絡んで、この著書は相反する誤解を招き、例えば、新左翼はソヴェトに対する批判的立場からこれをスターリン主義批判として賞賛し、他方で共産主義者の側では、これを否定的に反ソ連的な冷戦のプロパガンダとして受け取った。マルクーゼの意図はそのいずれでもないが、彼の態度にも両義的なものが無いとは言えず、彼自身、その後本書について言及することは稀であった。しかしながら、ルカーチをはじめ、フランクフルト学派は——ウィットフォーゲルとホルクハイマーを除いて——三〇年代と四〇年代の問題について沈黙を守ったのに対して、本書は、批判理論によってソヴェトの政治とイデオロギーを批判した最初の大胆な試みである。マルクーゼは、ソヴェトの《現実》と《イデオロギー》を対峙させ、古典的マルクス主義からの離脱と歪曲を鋭く剔抉する。ソヴェトにおける支配は、「新しい合理性」＝官僚制として抑圧的に機能している。ソヴェト・マルクス主義はその合理性を正当化するための科学となり、弁証法の機能は、党によって解釈された決定論的法則となった。ソヴェトの「合理的社会」批判は、次に述べる高度産業社会批判と似通っていて、彼の現代社会理論として意義深い——もっともマルクーゼはいわゆる《収斂理論》を肯定しているわけではないが。

五〇年代の《イデオロギーの終焉》論者に反駁して、マルクゼーは、生産、消費、思想、日常生活のあらゆる領域にわたって、《文化》総体がイデオロギー化され、社会統制手段としてポジティブに機能し、「政治的二元性」支配がますます貫徹されていることを論証する。ケルナーの読み方によれば、「一次元的人間」における高度産業社会批判は、正統派マルクス主義者よりも遙かに深く商品生産社会の新しい形態を認識しており、それだけにマルクゼーはマルクスの理論を問題化せざるを得なかったのだが、現代資本主義に対するマルクスの批判に忠実なのである。しかも、彼の問題の射程には、「一次的人間」と同時に発表された「マックス・ウェバー」の著作における産業化と資本主義」にみられるように、西欧の合理性が資本主義的支配に転化し、形式的合理性が技術合理性に転化した《合理化過程》が、今や後期資本主義社会における非合理的支配という歴史形態をとるに至ったという認識がある。そこにおいて《産業》プロレタリアートは、もはや生産の基盤ではなくなり、オートメーション化と機械化によって肉体的苦痛と貧困は軽減され、体制内化されているのである。一次元的社会における《幸福な意識》——マルクゼーのいう「抑圧的脱昇華」とは、操作された性の解放と体制への服従とを示す逆説的な言葉である。しかしながら、マルクゼーがケルナーに語ったとおり、彼はベシミズムに陥ったことはなく、たえずトータルな革命を意欲し、一九一八年の革命、そしてローザ・ルクセンブルグの印象を拭い去

ってはいなかった。この本の末尾は、批判理論は現在と未来とを架橋する概念を持ちあわせておらず、ネガティブなものにとどまらざるを得ないと書きながらも、「偉大な拒絶」にみずからを生を与えるものに希望をうなぎ、Nun um die Hoffnungslosen willen ist uns die Hoffnung gegeben というメンヤミンの言葉をもって結ばれている。

一九六五年から七九年にかけて、「抑圧的寛容」にはじまり、『五つの講演』「解放についてのエッセイ」「反革命と叛乱」「美学的次元」に至る作品は、折からのヴェトナム反戦、学生運動、いわゆる confrontation politics に呼応して、まさに「革命的オイフォリー」の状態で書かれた。これらのなかで、マルクゼーは、資本主義社会の解体しつつある傾向とともに、とりわけアメリカにおけるブルジョワ・デモクラシーが新たなファシズムに移行しつつあるという危惧を抱きながら、新しい革命主体を模索したのである。ケルナーが引用しているエンツェルベルガーとの対談において、マルクスのプロレタリアート概念は十九世紀中葉の歴史的特質にすぎず、今日精密な階級分析を行わずしてプロレタリアートについて語ることは、マルクスの歴史のカテゴリーの物象化である、と明言されている。マルクゼーは、新左翼、第三世界の革命分子、《新しい労働者階級》、女性解放運動等、体制に統合されていない人びと、体制の暴力に反対するあらゆる革命勢力に訴え、《統一戦線》を呼びかけたが失敗に終わった。晩年にいたって、彼はSDSの革命行動に警告

を発し、みずからも《革命的ロマン主義》から後退して、知識人エリートの教育的・文化的機能を重視するようになる。ケルナーの言うように、闘争集団を革命行動へと溶解する、具体的革命理論がマルクーゼに欠如し、その都度ひとつの革命主体を措定しようとする彼の思考はヘーゲル・マルクスの伝統へ固執しすぎるところがあった。

芸術と技術との一致——マルクーゼはこれまでのテクノロジーの論理を完全に変換して、美学と総合されたポスト・テクノロジーの合理性なるものを確信していた。「新しい感性」をめざす価値転換は、男性支配的な抑圧的・攻撃的欲求に代って、女性的な価値がエロスの生のエネルギーを表現することになるであろう。そして、美学的ニエロスの欲求が新しい人間性と生活世界を創造するであろう、と。芸術詩の言葉こそ弁証法の言葉であり、それは幻想であるがゆえに、日常性と歴史性を超越した「偉大な拒絶」の解放の力となり得る。しかし、ケルナーは、『美学的次元』の諸節のなかには、芸術と現実とは所詮和解しがたいこと、芸術は世界と悪を救済することが不可能であること、さらにはマルクーゼ自身の迫りくる死の受諾を思わせるような言葉を読み取っている。「……貧困は廃棄されえよう。だが、死は社会、歴史に内在する否定性として相変らずとどまるであろう」と。マルクーゼの美学は、アドルノの死後刊行された『美学理論』における前衛芸術についての鋭い社会学的分析はみられず、美の普遍的カテゴリー——しかも彼の場合、ブ

ルジヨワ文化の古典への信仰が際立っている——を追求するのあまり、芸術のもつ解放的要素と保守的要素との間の差異等を閑視している。ケルナーはこうした問題点を指摘しつつも、彼のニートピアと解放への不断の省察を賞讃する。

最後に、ケルナーの本書の結論部分を抜き書きしておく。「マルクーゼは、哲学と政治を統一するとともに、社会主義思想のニートピア次元を復権させようとした数少ないマルクス主義者のひとりであった。……事実、マルクス主義の危機、その一部は、ニートピア的思考の欠落と、社会主義および解放に関する未開の地平であった」「独断的なマルクス主義者、散文的な自由主義者、そして怯懦な保守主義者たちの瞋恚の炎をかきたたてたのは、ほかでもないマルクーゼの企投のニートピア的、思弁的次元なのである。私の見解では、マルクーゼの《ニートピア主義》もしくは《ロマン主義》を追い払う人びとは、彼の思想の一層魅惑的な特質の幾つかを評価しそこなうばかりでなく、その根本的な緊張と曖昧性を見失ってしまう」「ある意味では、マルクーゼ理論は、《ロマン主義的な反資本主義》の最終段階とみなすことができる。生涯にわたって、マルクーゼの資本主義批判は小止みなくつづき、欠陥はあったけれども、彼の思想のうちで最も人を惹きつけずにはおかぬ側面のひとつであることに変わりない。しかし、マルクーゼは《現存する社会主義》に対してまったく厳正な批判者なのである」「この研究で私が分析を試みたマルクーゼの思想は、まさに正統派マルクス

主義の幾つかの要素をとどめてはいるけれども、他の点では、異端的であり邪説的でさえある。したがって、彼の思想は古典的マルクス主義の内にあると同時に、しかもそれを超えている。実際に、彼の思想を通常のカテゴリのなかで範疇化することはきわめて困難である……」。

これらの言葉を読んで直ちに想い浮かぶのは、エルンスト・プロッホであろう。はたせるかなケルナーは、『この時代の遺産』の言葉を参照しながら、次のように本書を終えている。「われわれは、エルンスト・プロッホのいう『未完の遺産』——それを同化し超越することが要求されるのだ——を委ねられている。したがって、今日批判理論は、マルクラーゼがみずからマルクス主義を我が物とし、それを乗り越えたと同じように、彼の遺産を我が物としなければならない。解放とユートピアは未だ存在しないのであるから」。もちろん、マルクラーゼの「未完の遺産」をそれとして批判的に継承することに異議を唱える必要はなく、とりわけ彼の現代社会批判には、彼の立場に同意すると否とにかかわらず、重要な示唆を認め得るであろう。ともかく、ひとりの強靱な思想家の批判的精神の歩みとその全体像についての本書の卓越した分析は、人びとに慇懃するに相応しいものである。ただ、つぎのような疑念だけは残しておく。結局、マルクラーゼの魂は、『ドイツの芸術家小説』に始まり、『美学的次元』に終る美の弁証法的円環をみずから閉じたことになるが、そこにはマルクスとフロイトの入り組んだ迷宮がなぜ必然的であっ

たのか、彼らとの理論的な関わりがマルクラーゼの世界と歴史への関わりを変えたことは確かであるが、かりにそれらの介在が無かったとしても、彼の根源に内在するひとつの世界、すなわちユートピアだけは依然として変らなかつたのではないか。そもそも「美と愛の王国 (Reich der Schönheit und Liebe)」(Herbert Marcuse, *Schriften*, Band I, Suhrkamp, 1978, S. 87)には、ボードレールの「旅へのいぢぢない」の詩句のように、「かしこにはただ序次まよひと美／栄耀と静寂しんじやくと快楽くわいらく」(『エロスの文明』南博訳〔紀伊国屋書店〕一四九頁、の引用による)というような象徴的風景のみが存在するとすれば、果たしてこれが生者のためのユートピアといえるのであろうか。

奈良 和重